ヒマラヤ遠征計画書

昭和三十二年九月

名古屋大学山岳会
岩　　稜　　会

成城大学岳士会人会
橋本一豊

5

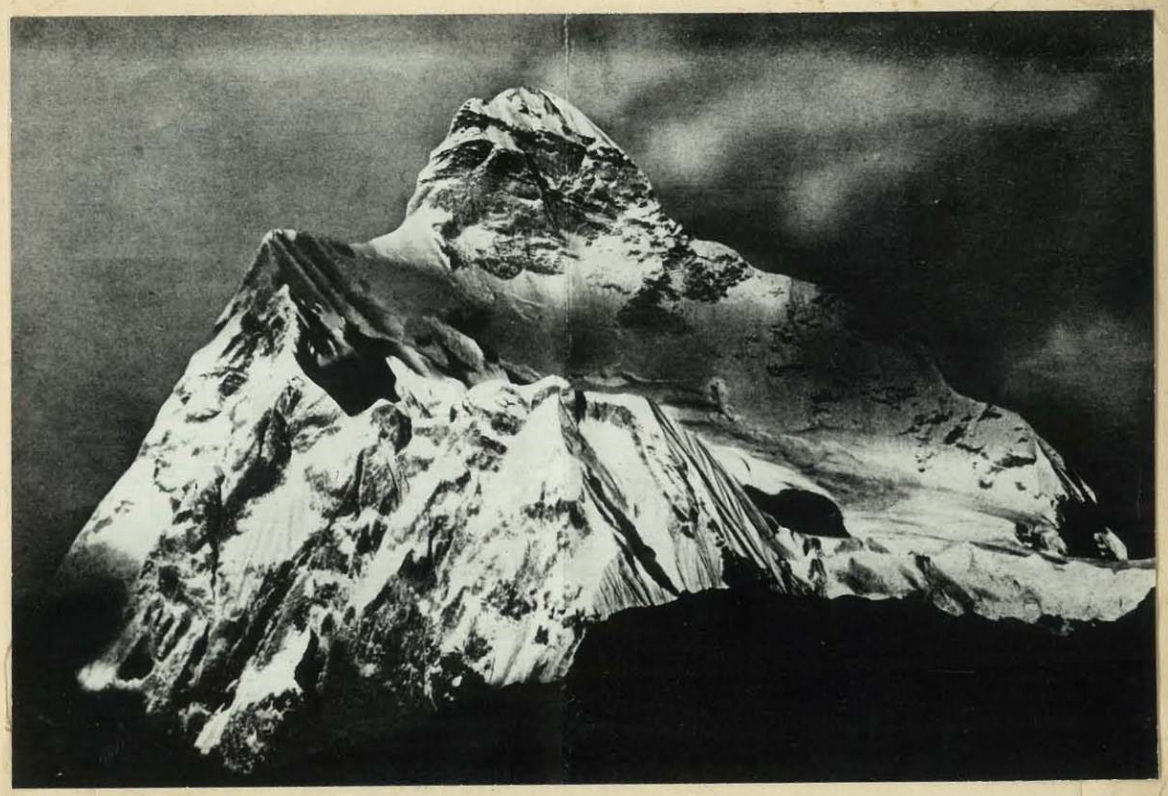


写真 1

ヤマタリ氷河側から見たジャヌー（セラー氏撮影）

写真 II

ヤルン氷河側から見たジヤヌー（エヴアンス隊撮影）

目　次

（一）　今後のヒマラヤ登山について …… 1
　1）　ヒマラヤ登山の意義 …… 1
　2）　エヴエレスト登頂後のヒマラヤ登山のあり方 …… 1
（二）　名古屋大学山岳会と岩稜会について …… 4
　1）　両者の関係 …… 4
　2）　岩稜会について …… 4
　3）　岩稜会の実績 …… 5
　4）　岩稜会のヒマラヤ計画 …… 6
（三）　昭和29年の名古屋大学のヒマラヤ遠征計画について …… 7
　1）　計画の大要 …… 7
　2）　ジヤヌー選定の理由 …… 8
　　(I)　ジヤヌーのもつ意義 …… 8
　　(II)　ジヤヌーの地理的条件 …… 9
　　(III)　ジヤヌー登頂の可能性 …… 9
　　(IV)　ジヤヌーに関する文献抜萃 …… 11
（四）　今回のヒマラヤ計画 …… 12
　1）　フランス隊との関係 …… 12
　2）　遠征計画の詳細 …… 13
写真
　I　ヤマタリ氷河側から見たジヤヌー（セラー氏撮影）
　II　ヤルン氷河側から見たジヤヌー（エヴアンス隊撮影）
別紙
　1　スイスよりの返信 …… 15
　2　遠征費用概算 …… 16
　3　地図2葉

（一）　今後のヒマラヤ登山について

1）　ヒマラヤ登山の意義

世界の屋根と呼ばれるヒマラヤは、地球上の最高峯エヴェレスト（8，848m）をはじめジャイアンツと呼ばれる8千米級の山を持つていることで、登山の意義以外に重要なものがある。即ち、南極、北極とともに地球の第三の極としての意義を持つものである。

人間文化の進展とともに、あらゆる現象が次々に明らかにされてゆくとき、この三つの極点への到達が人類の目標となつたのは当然であつた。しかし、南北両極が到達された後でも、ヒマラヤという第三の極は、莫大な出費と幾多の尊い犠牲と近代科学の粋が結集せられての攻撃にもかかわらず、30年もの間ジャイアンツの一つの頂すらも許さなかつたのである。人間の歴史にとつては類例をみない恐るべき相手であつた。

しかしながら、1950年、フランス隊によつてアンナプルナ（8，078m）というジャイアンツの一角が崩され、ここに長年のジンクスが破られた。次いで、1953年、地球上の最高点エヴェレストが英国隊の九回目の攻撃の末遂に登頂され、ここに30年間にわたつた第三の極点への斗争の幕が閉じられたのである。これらの成功の原因はもとより、あくまで目的を達しようとする人間の執拗な斗志と貴重な経験と、国民的な支援によるものであるが、フランスが「ナイロン隊」、英国が「酸素隊」と呼ばれているのをみてもわかるように、人類文化の発展が大きく寄与したものであつた。ヒマラヤ登山が「人類文化のバロメーター」と呼ばれる所以であり、逆にヒマラヤ登山はその国の持つ文化の尺度を示すものとしての意味をもつていたのである。

2）　エヴェレスト登頂後のヒマラヤ登山のあり方

さて、エヴェレストが登頂され、更にK2（8，611m）、カンチエンジユンガ（8，616m）といわゆるジャイアンツの殆んどが登られてしまつた今日、今後の

ヒマラヤ登山は当然大きな変化がおきねばならない。即ち、エヴェレスト征服後のヒマラヤ登山には第三の極点征服という登山以外の重要な目標が失われたのであり、今後のヒマラヤ登山に果して莫大な経費（例えば日本のマナスル登山には総計1億の金がかかつている）と外貨が使われるだけの価値があるかどうかが問題とならねばならないのである。果せるかな、それらのジャイアンツに挑んだ遠征隊の報告書の中では「今後のヒマラヤは登山本来の姿に戻るべきだ。それは8千米峯のように莫大な経費のかかる山でなく、7千米級でしかもスポーツ登山の精神にのつとつた登攀、つまり技術的により困難な場所をどのようにして登つたかという、登攀の内容そのものに移つてゆかなくてはならないであろう」という意味のことをこぞつて述べている。繰返して記せば、今後のヒマラヤは人類の目標としてでなく、スポーツ登山としての最高の場を提供してくれる檜舞台、つまり登山のオリムピツクとしての意味をもつて、各国の優れた登山家によつて、より大きな困難を可能にすべく競われることになると思われる。もとより従来とてもそういう気持で7千米級の山々を地味に登つていたパーテイは数多くあつたが、それらは第三の極へとあふられた国家的事業の影に姿をひそめていたのであつた。

さて、ヒマラヤ登山がスポーツ登山本来の姿にかえつて、登山のオリムピツクとしての意味のみをもつようになつたとすれば、具体的にヒマラヤ遠征隊はどのような姿であるべきであろうか。（もとより偵察とか探検を主とした遠征は別であるが）我々が北アルプスや南アルプスの山を登るように、それは登攀のためのみのパーテイでなければならない。（鎖国直後のように入山のための政治的困難さはもはや解消されたと考えられる）。出来うれば尽く登頂隊員であることが望ましい。又ヒマラヤ遠征は自分達の出費だけでまかなわれる場合はまずなく、大部分を寄附に仰ぎがなくてはならぬ以上、隊員は道義的にも困苦に耐え、質素でなければならない。例えば、誰も彼もが無計画に写真機を持参するとか机や椅子にいたるまでを山へ運びこむなどといつたことは今後は許されないと思われる。

又、いやしくも各国の注視の中での登山であるから、オリンピツクに参加する選手同様、そのパーテイはその国を代表するような登攀の実力と立派な考え方をもつたものでなくてはならない。このためには、隊員は他のスポーツのように全国から選ばれる

ことが理想であるが、ただ登山は、ザイルを結んでの登攀等危険防止のため、いわゆる完全なチーム、ワークが必要なので、結局、高い実力を持つた一つのグループということが理想となる。従来の各国の遠征をみるのに、国家的な大遠征以外は、一一つのグループの場合が圧倒的に多い。

要するに今後のヒマラヤ遠征の価値は、いわゆるオリムピツク出場の価値と同じように考えられてよく、従つて、遠征隊もそれにふさわしい内容のものでなければならないと考える。国民の支援をお願いするのも、そうしたことでなされねばならないであろう。

（二）　名古屋大学山岳会と岩稜会について

1）　両者の関係

名古屋大学山岳会は、名古屋大学山岳部のOB、現役及び入会を希望する名大教職員をもつて構成されている。又、名古屋大学の教養部の前身は旧制第八高等学校であり、名大山岳部のOBは同時に八高山岳部のOBである者が多いという関係から、名大山岳会は八高山岳部の伝統の影響をうけるところが大きい。本会会長の須賀太郎名大教授は創立と同時に名大に赴任し、以来同山岳部を指導していた。

一方岩稜会は次の経過によつて誕生したものである。即ち八高及び名大山岳部出身であり名大第一回卒業生の前記石岡は終戦直後、郷里の三重県鈴鹿市の神戸（カンベ）中学校（現在の神戸高校）の教諭をとることになつたが、終戦の年の昭和20年の10月に、生徒の要望によつて山岳部を創設した。岩稜会は、同校山岳部の出身者を中心として結成した山岳クラブである。岩稜会という名称は、石岡の生みの親である八高山岳部のOBの会が「山稜会」と呼ばれているのにちなんで名付けられたものである。従つて、名古屋大学山岳会と岩稜会とは、同一性格のものであり、当初よりこの両者は深い親交をもつものである。石岡は現在、名古屋大学学生部に勤務している。

2）　岩稜会について

石岡が山岳部を創設したのは終戦直後で、野球部とか競技部とかいつた他の運動部が存在していなかつた事情から、いわゆる運動神経の発達している者や斗志ある者は尽く山岳部に入つた。当時山岳部員は100名を越したのであるが、彼等は終戦後の鬱陶しさも加つて、その年冬の鈴鹿山脈の縦走を手初めとして、毎土、日曜を夢中で山に入つたのであつた。運動神経の発達した学生は他の運動部にとられてしまうという通常のケースに比してこれが大いに異るところであるが、この影響は、かつて八高山岳部時代登攀出来なかつた鈴鹿山脈御在所岳藤内壁のコースが、次々と登られてゆくことによつて現れはじめたのであつた。更には、山岳部誕生後二年にもならない昭和22年7月、登攀不可能と信じられていた穂高岳屏風岩の正面岩壁の登攀が、このわずか当年17才の少年によつて解決されたのである。

屏風岩登攀後も、彼等は穂高の無雪期、積雪期の岩壁に、数多くの記録を打ち立てていつた（日本山岳会発行「山岳」46，47年　始め、雑誌「岳人」「山」「山と渓谷」等に紹介）。

又岩稜会は、後になつて、神戸高校出身者以外の人達でも山を通じての友人には積極的に参加をお願いし、現在顧問に名古屋大学教授須賀太郎博士、三重県山岳連盟会長、慶応大学山岳部OB伊達忠雄氏等を含め会員は約50名に達し、東京、名古屋、福岡には小さいながら支部を有している。かくして岩稜会は創立以来12年間、一シーズンも欠かすことなく、主として穂高の岩壁の登攀にたゆまぬ訓練を続けて来たのであり、いわゆる学生登山団体に比して困難な岩壁登攀において素質と訓練、経験において遙かにしのぐものがあると自負する所以である。

屏風岩初登攀当時、童顔の少年も今では立派な社会人として活躍し、又会の指導的任務を果しており、ヒマラヤ遠征隊員として恥かしからぬものがあると信ずる。

3）　岩稜会の実績

（I）　屏風岩正面岩壁初登攀

屏風岩の登攀について簡単に述べれば、屏風岩は日本最大の絶壁（700m）であり、且つ日本に残された最後の未登の岩壁で、かつて登攀不可能と言われて来たものであつた。これについて、

(1) 昭和22年度「日本人の目に映じたスポーツ界世界10大出来事」中、専門家はかく見るの項で、第四位にあげられた。

(2) 九州福岡における第五回国民体育大会では、戦後の最大業績として、早稲田大学のペテガリ岳登攀とともに、石岡は記念講演を行つた。

(3) 朝日新聞社発行「十年の道算」（戦後重要記事切抜集）で、この登攀は登山界殆んど唯一の存在として大きく扱かわれた。

(4) 現在まで十年を経過したが、第二登に成功した者はいない。なおこれについて石岡繁雄著"屏風岩登攀記"250頁がある。

(II) 明神岳第五峯東壁（1957年）並に前穂高北尾根四峯、甲南ルート（1958年）の春期初登攀、夏期においても非常に困難な場所で、当時としては初登以来一、二のパーティの通過を許していたのみの問題のルートである。1949年から1952年にかけ3年間の努力の末、完登したものである。

(III) ナイロンザイル事件

これは功績とはいえず、悲しむべき失敗の記録である。それは、昭和30年1月2日、厳冬の前穂高において、ナイロンザイルの切断により、友を失つたことである。しかし、この事件を通じて、岩稜会は登山者の生命の綱であるザイルの性能について登山界に新しい発見をもたらし、大きな貢献をなしたものと考えている（山岳雑誌岳人83号）（朝日新聞連載小説「氷壁」のモデルになつたもの）。

(IV) 近く上梓予定の「穂高の岩場」上下二巻

5年前から山岳書出版社朋文堂の要請により、「穂高の岩場」上下2巻の出版の諸準備を完成し、上巻は年内上梓の予定である（「山と高原」7月号予告）。これは穂高の岩場の約50のルートの夫々を、写真計900枚で説明し、更にそれに含まれるすべての危険な場所を、危険の種類と度合（等級表）とを示し、これによつて穂高の素晴しさを紹介し、併せて遭難防止に資せようとするものである。本書は登山界に画期的なものと信ずるのである。

4） 岩稜会のヒマラヤ計画

さて、山を志す者が誰しものあこがれの的であるヒマラヤに対し、石岡は戦前に

つくられた八高山岳部のJanne Himalayan Expedition Vereinの創始者の一人として、20年来執拗にその実現を夢見て来た。岩稜会員一同もとより、ヒマラヤに対する情熱は人一倍強いものがあり、この実現の機会を虎視眈々としてねらつていたのである。

(1) 昭和27年、福岡山の会によつて戦後日本からの初めてのヒマラヤ遠征が計画されたが、岩稜会員3名は福岡山の会の好意により遠征隊候補者として、この年の正月の富士山での合宿訓練に参加した（この計画は実現に至らなかつた）。

(II) 第一次マナスル遠征隊の隊員選考についても日本山岳会関西支部から三名選出されたが、そのうち会員一名が選ばれていた（チームワーク等の理由で、三名とも駄目となつた）。

(III) 次の項で述べるように昭和29年度の名大ヒマラヤ計画は登頂隊全員が岩稜会員であつた。

しかしながら、もとより弱体であり、自ら、その母体となることは出来ない。従つて以下にみられるごとく、その努力は専ら他の計画に加入させていただくための努力にすぎなかつたのである。

（三） 昭和29年の名古屋大学ヒマラヤ遠征計画について

1） 計画の大要

昭和29年須賀、石岡等の発案により、名古屋大学からヒマラヤ遠征が本格的に計画され、実施への努力がなされた。その時、登攀の対象としてジヤヌー（Jannu 25,294ft.7710m）から選ばれたが、これは当時に於て将来のヒマラヤの趨勢を喝破していたとみなすことが出来るのである。

計画の経過は次のようである。

遠征会の委員長には勝沼名大学長をお願いし、名大出身の国務大臣加藤鐐五郎氏を顧問に快諾を得、登山に関心を有つ多くの名大教授を評議員として、29年3月丸栄ホテルで盛大なる発会式を行つた。（各新聞社、山岳雑誌に大きく報道された）。

須賀教授及び石岡は東京に赴き、当時の日本山岳会々長松方三郎、槇有恒、堀田彌一、西堀榮三郎、村山雅美等各氏にお目にかゝつて、御支援をお願いした。

次でこの後援を朝日新聞社にお願いし、藤木九三氏からも御声援をいたゞいたのであるが、当時、外貨事情最悪の時であつた事と、マナスルとの関係から、朝日新聞社の後援は得られず、結局、名大のジヤヌー遠征計画は中止となつたのである。

尚、当時の計画は、学術研究を主とすべきであるとの空気が強く、~~右大~~20年の実績のある名大高山医学の研究を主とし、之に名大から3名参加し、登頂隊として、岩稜会から4名加わることに決定していた。

このときの登頂隊員の使命は、ジヤヌーの登頂と、科学班を安全に高所に導くという二つの使命をおびていた。

2） ジヤヌー選定の理由

次にかかげる三つが主要な理由であり、岩稜会の性格として正にうつてつけの対象と考えた。

(I) ジヤヌーのもつ意義

従来ヒマラヤ登山の常識は氷雪の尾根を通つて頂上に達することであり、岩稜をルートとすることは非常識とされていた。

そういう高度でハーケンを打つて登るなどということは出来ないという理由である。 しかし、氷雪をルートにするという方法では、エヴエレストという最高点が解決されたのであるから、より困難を解決するスポーツアルピニズムの本来の姿として、次の目標は岩稜をルートとするヒマラヤ登山でなければならないはずである。

それはあたかもスイスのモンブランが登られた後、次に課題となつたのはあのそそり立つマツターホーンであつたのと同様である。

一方、ヒマラヤでの岩登りがはたして非常識であろうか。 たとえば、バウアー隊がカンチエンジュンガで、酸素なしで氷の隧道を掘つたことを想いおこせば、それが不可能とは言えないはずである。

少くとも寄附金と貴重な外貨をつかつて、何の解決をもたらさないエヴエレストより低い雪稜の山へゆくことは、スポーツ登山としての立場からしても、山家としての良心が許さないのである。

ジヤヌーは後述の文献抜萃で明らかのようにヒマラヤのマツターホーンであり、来るべき時代の課題である。登山に志す者として全力をあけてぶつかるにふさわしい山と考える次第である。

(II) ジヤヌーの地理的条件

ジヤヌーは、カンチエンジエンガの西南八哩に位し、ヤルン氷河とカンチエンリバーとにはさまれ、山麓には、村落タンザがあり、物資の買入に便利である。

又、ジヤヌーはその山麓までのアプローチが短かく、避暑地ダージリンからわづか10日間の行程に在る。このため、人夫賃その他の諸経費が非常に節約される。又、ネパールの主都カトマンズを経由しないので、所謂政治的な煩雑さからのがれられ、経費もそれだけ節約される。

(III) ジヤヌー登頂の可能性

登頂は、頂上へ導かれる登攀可能のルートが発見されるか否かにまづもつて第一の問題がある。一般に、ルートの発見のためには、まづその山を周囲から充分観察しなければならない。観察によつて可能性がない場合は、登攀不能であろう。しかし、可能性がありとみられた場合でも、観察の不充分な点をおぎなうため及び観察そのものの意外な欠陥を発見するため、次の段階として偵察隊による試登がなされねばならない。その結果が比較検討されその上でルートの決定となるのである。

かくの如く、ルートの発見ということは、自分達が直接眺めても容易に決定されるものではない。ましてや写真も記録も殆んどないという山岳について、それを云々することは全く無暴である。しかし、登攀不可能といわれるジヤヌーを選ぶ以上、ルートについても、せめてそこに一つの可能性を胸中深く秘めていないわけにはいかないのである。

可能性あるルートは、通常、谷から尾根へ尾根から頂上へととられる。例えば高距千米とか2千米とかいう岩壁を直接たどつて頂上へ達しようとすることは、荷の運搬や、テントをはることがむづかしく、不利な戦法であることはいうまでもない（しかし、今後それを解決する技術が要求されてくると思われるが）。

ジヤヌーの場合について考えてみる。ジヤヌーについて我々の入手出来る主な記録はセラーの写したヤマタリ氷河側からのもの（[illegible]の写真Ⅰ）、エヴアンス隊の撮影になるヤルン氷河源流からのもの（同じく写真Ⅱ）、及びスマイスのジヤヌー氷河からの観察記録（掲載）のみのようである。それらを綜合して考察してみるとき、我々は、ジヤヌー氷河及びヤルン氷河側に可能性あるルートの発見は困難のように思う。

ヤマタリ氷河からのルート予想図

ジヤヌー周辺の概念図

我々は、可能性あるルートは、ヤマタリ氷河から、つまりセラーの写真にうつつている部分に得られると確く信ずるのである。（なお、この写真とヤマタリ氷河とを結ぶ写真は、スマイスの「カンチエンジュンガの冒険」にある）。

我々は、写真1から写しとつた右のスケッチについて、南稜をルートとする。（Ⅰ）のコースを第一候補とし、西稜をルートとする（Ⅱ）のコースを第二候補と考えている。双方のルートともいくたの問題をもつていると考えられるが、いづれも最後の頂上への岩壁攻略が、キーポイントであろう。その点南稜のルートは西稜に比して容易と考えられる。

岩壁には、ハーケンによつて岩壁に吊り下げられる。ハンモックのような軽テントを持参し、更に二本のハーケンによつて固定される特殊の梯子を用意するつもりである。（この二つの装備は、今冬穂高で実際に使つてみる予定である）。

このルートは、不可能と思われない。努力すれば必ずや、そこに解決の道が開ける

と考えるのである。

(四) ジヤヌーに関する文献抜萃

ジヤヌーは標高こそ7,710mであるが、従来から〃恐怖の岩山〃として知られていた。

次にヒマラヤの権威者スマイスの言葉を引用してみよう。

「我々が翌朝4月26日に眼を覚ますと、全く雄大壮厳なジヤヌーと、その附近の山々とが見えた。この方面からジヤヌーに登れる見込はまずない。私はこの北側の絶壁の物凄い部分程攻撃し難いものを未だ見た事がない。ジヤヌー氷河の南側及び、ジヤヌーの西側に位する山々も、高さは比較的低いが、同じく不可能と思われる。これ等の山々は、鋭い楔形の岩で、その表面は時と天候によつて、小刀の刃やビスケットの模様形になつた氷で覆われている。此等の峰は、その主となるリッヂを持たない。それ等はあちらこちらに上向きにとび出た非常に嶮しく複雑な楔形の峰なのである。そして、その尾根や山腹は、途中で完全に切断されて、岩の絶壁となつたり、垂れ下る氷河となつたりしているのが普通である。此等の峰を眺めていると、人はアルプス山脈や、その他の山脈は持たないが、ヒマラヤ山脈は持つているあの地質学上の新しい点を想い出さずにはいられなくなる。此等の峰は登山家に登る事の出来る道を与える程には、未だ風雨に依つて破壊されていないのである。それ等は未だ自然の壁であり、噴火爆発によつて生じた当時の壁の塊なのである。時が経つても殆んど軟化していないのである。それ等の峰は何となく不安な、不愛想な感じを与えているが、見ておれば雄大装麗であり、登るとなれば、不吉な想を昼する山である。

又、次のようにも書いている。

「南西の方向に、25,294フイートのジヤヌーが聳えていた。これ以上近づき難くみえる山を想像するのは六ケ敷かろう。ヒマラヤ山脈の多くの峰と同様、それは楔形をしている二つの頂上が、殆んど水平のリッヂの両端に突き出ている。一度、此のリッヂに達すれば、どちらの頂上も征服出来よう。しかし、如何にしてそのリッヂに到達するか？我々の正面に当る側には、絶壁が一枚のなめらかな物凄い花崗岩の壁となつて聳え立つていた。もう一方の側も、写真で判断すると

同じ様に、恐しい絶壁になつている。それではこの二つの山頂は直接に究められ得るか？答は「否」である。楔形の峰は両端とも絶望的な絶壁となつて了つている。かくしてジヤヌーは登山家に一つの課題を提出していると言える。ジヤヌーは、カラコラム山脈にある、あの有名なMuztagh Towerに匹敵し、世界中で最も凄い岩山の一つである。」

（四） 今回のヒマラヤ計画

今やマナスル登山は、成功裡に終結したので、29年度のジヤヌーの計画を実現すべく、本年当初から再び本格的活動に入ることになり遠征計画の実施にとりかかつた。

1） フランス隊との関係

しかし、ここではからずも重大な問題が発生した。フランス隊によるジヤヌー遠征の報道である。これは、実際には驚くにあたらないことで、上述のように、ヒマラヤがスポーツ登山対象としてみられるとき、ジヤヌーの発見は当然すぎる帰着であり、むしろこれまで他国が目をつけなかつたことの方が不思議である。

しかし、何はともあれ、この報道は我々計画にとつて致命的といえる。何となれば、ヒマラヤの常識として、従来一つの山を二つの隊が同時に登攀することはなかつたからである。何故このような慣習があるかは不明であるが、おそらく隊相互のトラブルを心配したものと思われる。しかし、更に考えてみるのにその間にトラブルさえなければ、スポーツの精神からして、特に8千米のように国家的目的をもつような山でないかぎり、一つの山にいくつかのパーティがとりついてかまわないと思われる。これは欧州アルプスの例をとつてみても明らかなところである。しかし、従来の慣習は、もとより尊重されねばならない。しかし、ここにこの慣習と矛盾する二つの前例がある。それは

(Ⅰ) チオーユー（ジヤイアンツ）の登攀では、オーストラリヤ隊とスイス隊が同じルートを登り、結局オーストラリヤ隊のみが登頂している。

(Ⅱ) ムズターグタワー（7,280m）は、イギリス隊とフランス隊が別々のルートから

ら登り、イギリス隊の登頂後5日を経て、フランス隊が登頂している。

何故こういう事態がおこつたかということは不明であるので（日本山岳会で尋ねてみたが、わからなかつた）、この点を含めて、スイス山岳会に尋ねたが、その返事は別紙1)のようで、上記の疑問については、明らかでないが上記の二例から考えてあるいは、そのような慣習は最近なくなつたのでないかとも考えられる。（しかし、ダウラギリーの例はそうでないように思われる）。今一度、スイスに尋ね、もし我々が、フランスとの了解がつけば、ジヤヌーを目指すこともかまわないと考えるということであれば、フランス隊に手紙してフランス隊の希望に従つて、以後の計画を決定したいと思う。例えば、我々の計画を来秋にするとか（フランスは今秋及び来春、なおフランスが登つてしまつた場合は第二登となるが、もちろん別のコースから考える）。フランスと同時季としても、ジヤヌーの別の面にするとか、別のルートにするとか、といつた場合が考えられる。

しかし、この手紙を出すには、我々の遠征の可能性つまり資金面の裏付が、確かであることが先と考えられるので、目下、この問いあわせを出すことをさしひかえている状態である。

ネパール政府の入国許可は、スイスの手紙にあるように、例えば〃ヤルン氷河周辺の山〃ということで問題なく得られるものと考えている。

又、たとえジヤヌーが不可となつた場合でも、我々はカンバッチエン（7,800米）等ヤルン氷河周辺の山で、スポーツ的登山の対象を見い出し、これを試みたいと考えている。

2） 遠征計画の詳細

次に遠征計画について述べる

隊員5名、500万円を計画している。従来の常識からすれば非常に少額であるが、これが必要にして充分な費用と思う（別紙2、参照）。マナスルに比して安いのは前述のごとく隊員が少ない、アプローチが短い（別紙3）。カトマンズを通らないこと、すべてに質素を旨とすることなどが主な理由である。

昭和29年度の名大のジヤヌー計画は約1千万円となつていたが、これは7名分

であり、5名になれば、700万円となり、今回は学術研究費を要せず、更に質素のため、例えば、航空機を船に、酸素ボンベを使わず（ジャイヤンツでもアンナプルナ、チオーユー等では使つていない）、又事務費も当時に比べ充分節約されうるので、500万円で充分可能と考える。竹節氏の〃ヒマラヤの旅〃にも軽装備遠征隊では、一人60万円と記してある。又、外国のいわゆる目立たないパーティは、いずれも程度に節約し、この程度で行つているのである。

又、隊員5名は少くなすぎると考えられるが、今後のヒマラヤはジャイアンツでない限り、この程度がやりやすいということは、今や常識となりつゝある。例えば、チオーユーを登頂したオーストラリヤ隊は、隊員3名であつた。

〔別紙 1〕

Zurich 8月13日(1957)発

Swiss Foundation For Alpine Research の

Othmar Gurtner 氏より

須賀太郎宛

6月24日付のあなたの御親切な手紙がついたときには、私は休暇中でした。

あなたがジャヌー登山を計画しておられること、及び1958年にそなえて準備中とのお知らせをいただいて感謝しています。

既に他のパーティがジャヌーに申込んだのではないかというあなたの質問について、我々は、パリーとロンドンにいる我々の友人に手紙を書き、この点及びあなたが望んでおられる多くの点を問い合わせました。おそらく一ケ月以内に、それらの調査の結果があなたにとどくと考えます。

あなたの計画を変更する必要はないと私は考えます。何となれば、現在においては、ネパール政府への登高許可の申入れについてもつとも重要なことは、従来登山の目的で入国したという外国人に掲げてきたいろいろの制限について無条件で許していることです。あなたはそれ等の制限をおそれる必要はありません。何となれば、たとえそれ等が厳しくみえるとしても、正当な査証を用意しておりさえすれば、ネパール自身において重大な困難はないからです。

あなたが何か特に我々に知らせたいと思われるならば、9月にスイスに来られることになつている槇氏に相談されたい。槇氏の住所は神奈川県茅ケ崎です。

あなたからの便りをまちながら

スイス山岳研究財団

Othmar Gurtner

〔別紙 2〕

ヒマラヤ（ジャヌー）

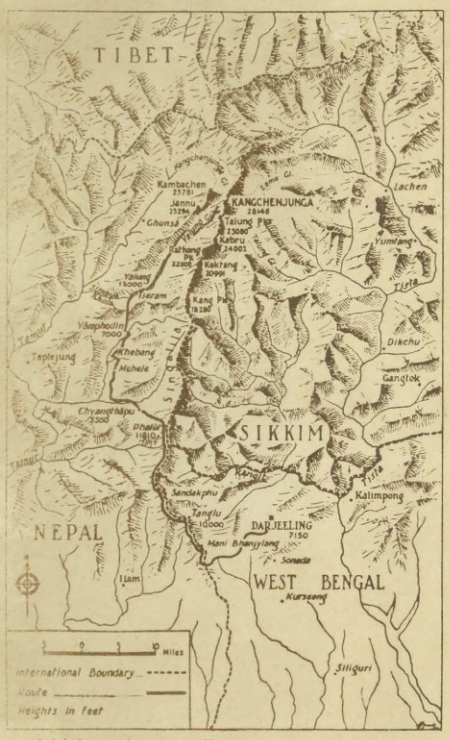
(イ) 外貨支払分

1 交通費		
カルカツターダージリン間往復汽車賃（2等）		
	ルピー 24R×74円×5名×2	17,760 円
その他		30,000
	交通費小計	47,760
2 滞在費		
カルカツタ（先発）	40R×74円×2名×（7泊+2泊）	53,280
〃 （後発）	40R×74円×3名×（4泊+2泊）	53,280
ダージリン	30R×74円×5名×（4泊+2泊）	66,600
	滞在費小計	143,160
3 人夫賃		
シエルパ（サーダー）	6R×74円×1人×80日	35,520
シエルパ	4R×74円×9人×80日	184,320
チツプ、その他		100,000
ポーター	3R×74円×（40+20）名×14日	186,480
		506,320
4 食糧費		
低所食糧（シエルパを含む）	2R×74円×15名×45日	100,000
5 通信費	500R×74円	37,000
6 交際費	1000R×74円	74,000
7 輸送雑費	1000R×74円	74,000
8 入山料		200,000
9 予備費		300,000
	外貨計	1,482,240 円

遠征費用概算

(ロ) 円貨支払分

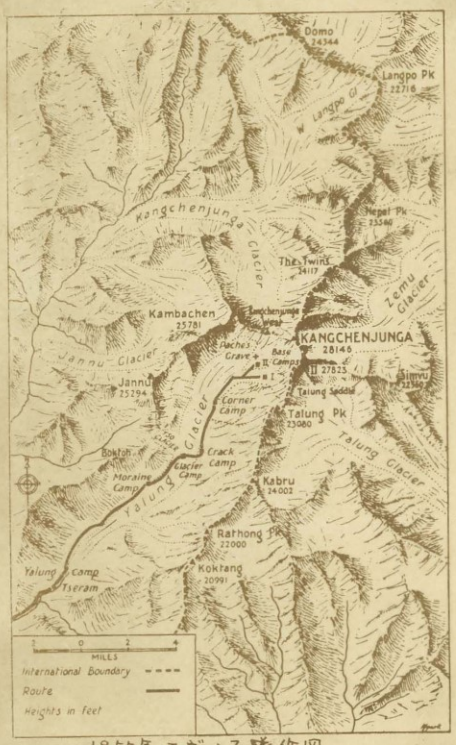
1 旅費		
船賃	神戸〜カルカツタ間往復72,000円×5人×2	720,000 円
2 貨物輸送費		
名古屋港〜カルカツタ	7,500円×5容積トン	37,500
3 食糧費		
高所用 シエルパ共15人分	400円×15人×45日	270,000
4 装備費		
シエルパ共15人分		2,000,000
（装備費は、マナスル、南極隊の装備を借用出来れば、もつと安くなる見込みである）		
5 医療費		50,000
6 写真費		50,000
7 通信費		50,000
8 文具費		5,000
9 梱包費		50,000
10 土産物費（ネパール原住民に対する）		100,000
11 事務費		100,000
12 諸雑費		100,000
	円貨計	3,532,500 円
	（外貨計	1,482,240 円）
	費用総計	5,014,740 円



別紙3

1955年 エヴァンス隊作図

"Kangchenjunga, the Untrodden Peak" by Charles Evans



別紙3

1955年 エヴァンス隊作図

"Kangchenjunga, the Untrodden Peak" by Charles Evans より